

はじめに

高齢化が進む中、老年看護学は1990（平成2）年に成人看護学から独立して教育されるようになりました。日本で急速に高齢化が進んだのは1970（昭和45）年ごろからですので、20年近く遅れての教育開始となります。その後も、介護福祉士の誕生、介護保険制度の制定など、社会情勢はめまぐるしく変化しました。このような変化を背景に老年看護教育への期待は高まり、「高齢者にいかに質の高いケアが提供できるか」を課題とする老年看護学は、看護教育の中でも重要な位置を占めてきました。1996（平成8）年の第三次カリキュラム改正では、講義だけでなく実習についても成人看護学から独立して教育されるようになりました。さらに、2008（平成20）年の第四次カリキュラム改正では、これまで一つの分野とされていた専門分野が専門分野Ⅰ（基礎看護学）と、専門分野Ⅱ（対象者の発達段階に応じた小児看護学、成人看護学、老年看護学など）、統合分野の三つに分けられました。これを受けて2011（平成23）年度からの教育に向けて改訂してきました。

その後、少子高齢化はさらに進み、老年看護学の果たす役割はますます大きくなってきています。

そもそも老年看護学は、学生のみならず教員も自身で体験していない年齢の人を対象とした看護を教える学ばなければならない領域です。そのため、高齢者自身からの学びを大切にしたいと考え、高齢者と真摯に向き合うことを大事にしてきました。1995（平成7）年に日本老年看護学会が発足して25年がたち、研究成果も多く示されるようになってきました。老年看護教育においては、それらによって得られたデータはもちろんのこと、学際性を重要視し、老年医学、老年心理学、老年社会学、老年歯科学、基礎老化学、建築学などの成果あるいはデータをも活用して教育を進めています。

改訂第6版ではさらに、社会資源や地域包括ケアの内容を充実させ、これからの老年看護に求められる多面的で柔軟な視点を含めた内容にブラッシュアップしました。

ナーシング・グラフィカ「老年看護学」は2巻で構成されています。本書『老年看護学①高齢者の健康と障害』では、老年期の理解、高齢者看護の基本、ヘルスプロモーション、高齢者の日常生活の実際についての考え方を中心に述べました。また、それらの理解を深められるように、高齢者の疑似体験や高齢者へのインタビューといった演習に活用できる内容を盛り込んでいます。『老年看護学②高齢者看護の実践』では、高齢者の生活を支えるという視点の上に、高齢者に起こりがちな身体症状や、疾患・障害をもつ高齢者に対し、生活機能の視点からどのようなケアが実践されればよいのか、そして長期療養施設の看護、認知症高齢者の看護、高齢者特有の終末期の看護などについて、具体的に学習できるような内容にしました。演習あるいは実習の場で役立つよう

に、実習例を示しながら解説しています。

本書では、以下のような特徴をもって記述することを心掛けました。

- ① 2025年問題，2040年問題，その後の多死社会などを視野に入れながら，現代の高齢者の特徴，社会的位置付け，高齢者にとっての健康やQOLの意義などを，国家試験必須の統計データなどとともに解説する。
- ② これからのケア体制は，人的資源だけでは十分なケアの質を維持できないことが予測され，それらを補完するために必要となってくるであろう，AIや介護ロボット，テクノロジーについても重要と考え，高齢者をサポートする社会体制（法，制度，社会資源）とともに，看護師の役割を絡めてわかりやすく記述する。
- ③ 日本の保健・医療・福祉のありかたは，地域包括ケアシステムが重要であり，地域に目を向ける視点はますます高まっている。この視点を身に付け，切れ目のない医療・ケア体制，公的サービスだけではなく，その間をつなぐサービスの体制づくりなど，多職種連携も含めた看護のありかたを学べるように，地域包括ケアシステムと，在宅・施設などの多様な生活の場における高齢者看護を詳しく解説する。
- ④ 高齢者看護の特性や，活用できる看護理論，倫理，アセスメント，高齢者特有のバイタルサインや疾患について，ポイントを絞って解説する。高齢者看護に重要な目標志向型思考や，高齢者の意思をどう尊重するかなどの倫理的な考え方を大切に記述を深める。
- ⑤ 高齢者の健康づくりは，生活習慣病を予防し，健康寿命を延ばして元気な日々を過ごすためにも大変重要であり，高齢者のヘルスプロモーション，高齢者の生活を支える看護などについて，加齢変化のポイントを踏まえて解説する。
- ⑥ 高齢者の基本的生活の支援として，コミュニケーション，食生活，住まい，社会参加，セクシュアリティについても，多くのページを割いて解説する。

老年看護学に関する知識や技術は，これからもさまざまな研究や実践によってよりよいものが工夫され，変化していきます。時代に即応した教科書となり，内容の充実を図っていくために，本書を利用された皆さまからの忌憚のないご意見，ご感想をお寄せいただけましたら幸いです。

編者を代表して 堀内ふき